

増補註釋
食道樂（春の巻）

弦齋居士著

第一 腹中の新年

今日は正月の元日とて天地乾坤自ら長閑なる中に此にも春風の浸みて來にけん、腹の中にて新年を祝する胃吉と腸藏「オイ胃吉さん、お目出度う」胃吉「ヤア是は腸藏さん、去年中は色々お世話さまでした子、復た相變りませずか、アハ、時に腸藏さん、今日は正月の元日と云つて一年に一度の日だからお互に少し樂をし度い子、私達位年中忙しくつて見じめなものは無いぜ、娑婆の人間は日曜日だの暑中休暇だのと一年中には澤山な休みがある、いくら忙しい奉公人でも盆と正月に藪入があるけれども私達計りは一年中休み無しだ、私は一日に三度づ、働いて居れば自分の役が濟むのに此では間食が好きで三度の外にヤレ菓子が飛込む、團子が飛込む、酒も折々流れ込むからホントに溜つたもので無い、それだから自然と仕事も粗末になつて荒でなしの物を和郎さんの方へ送つて進げて毎度劔突を喰ふが是れからはお互に仲を好くしやうではないか」腸藏「それは私も大賛成さ、和郎さんは消化するのが役、私は絞るのが役だから和郎さんの方でよく食物を消化して呉れ、ば私だつて絞る仕事も樂だけれども、毎日の様に消化れないものをよこすので時によつては和郎さんの方へ突戻したり、時によつては下の方へ押流したりする事もある、荒ごなしどころか折々は丸の儘で送つてよこす事もあるからツヒ喧嘩も始める様なものさ、今朝の雑煮餅だつて随分荒ごなしだつたぜ」胃吉「あれは堪忍して貰ひ度い、今日は元旦だから樂をしやうと思つて居る處へ朝の雑煮餅が飛込んだも／＼十八枚飛込んで來た、それも子、玄開番の齒太郎さんが能く嚙碎いてよこして呉れ、ば可いけれども、今朝なんぞば齒太郎さんが遊んで居て丸で鵜呑みだから子、その代り可笑しい事があつたぜ、齒太郎さんのお内儀さんのお金さんが餅へひつ付いて釣り上げられてモ一少して喉の孔、落ちるところさ、カツと云つて吐き出されたから口の外へ飛出して漸と助かつたけども一時は大騒ぎだつた、全體お金さんは

前の方に居るから何の役に立たない、奥の方に坐つて居なければ食物を噛む事が出来なからうに子」腸藏「それが全たく外見だからだよ、外見にお金さんを前の方へ置くのだ、肝腎の奥の方はおゴムさんなんぞに任せ切りだから齒太郎さんだつて碌な仕事が出来ない、仕事を大切に思つたら前の方はおゴムさんでも何でも宜いけれども奥の方こそ金さんに手傳はせなくつては仕様が無い、正月さう／＼お金さんも飛んだ目に逢ひなすつた子」胃吉「マア何にしろ今日はお互に遊び度いものだ、私達だつて稀に休息もしなければ根氣が竭きて愈よ働けない、娑婆にある大きな蒸汽機械も折々休息をさせて大掃除もしなければ塵が溜まつたり油が切れたりして直きに機械が壊れて了ふ、機械は壊れても取換へる事が出来るけれども私達計りは掛けがへが無い、随分心細いものさ」と夢中になつて話しける處へ何やら紅き水の上より流れ来るものあり、胃吉驚き「オヤ／＼何か來たぜ、妙なものが、ウムお屠蘇だ、モミの布片へ包んで味淋へ浸してあるからモミの染色が一所に流れて來た、腸藏さん直にそつちへ廻して進げるよ」腸藏「イヤ眞平だ」

第二 酒の洪水

人は氣樂なもの、腹の中にて斯る恐慌を起すとも知らず、平生胃吉や腸藏を虐使用するに馴れけん、遠慮も無く會釋も無く上の方よりドシ／＼食物を腹の中へ詰め込み來る、胃吉と腸藏驚くまいことが「ソラ來たぞ何だか堅いものが、是れは照ゴマメだ、石の様にコチ／＼して居る、齒太郎さんが噛まないと見えて魚の形がそつくりして居る、斯んなものをよこされては溜まらん子、オットどつこい、復た來た、今度は數の子だ、乾固つて鹽の辛い奴を碌に鹽出しもしないで拵へるから消化そつと思つても消化れない、腸藏さん、ホントに泣き度くなる子」腸藏「元日から災難だ、オイ胃吉さん、危ないぜ、上の方から黒い石が降つて來た」胃吉「成程降つて來た、是れは黒豆だよ、よく煮て無いから堅くつて石の通りだ、擇りも擇つてナゼ斯んな悪いもの計りよこすだらう、少しは手數のかゝらないものを呉れ、ば宜いのに、オヤ／＼復た來た、今度は柔らかい、何んだらう、玉子焼だ、然し何だか

少し臭い子、ブーンとイヤな匂ひがしたぜ、腐つて居るのではないか」
 腸藏「腐りもする筈だ、正月のおセチにするつて十日も前に拵らへて
 お重へ詰めて置いたのだから、せめて玉子でも新らしければ少しは持
 つけれども、二月も前に外所から貰つた到來物の玉子だ、それも上海
 玉の下等物で、割た時は大概卵黄が壊れて居た、腐つたものは堅いも
 のより尚ほ悪い、屹度例の蟲が居るよ、よく検めて御覽」胃吉「オー
 居るとも、ウジャ／＼居る、私は此蟲が大嫌ひで子、蟲を見るとぞ
 つとして手も付けられない、中でも虎列刺の蟲や赤痢の蟲は一番イヤ
 だ」腸藏「此頃はペストの蟲と云つて大層怖い蟲があるそうだし、蟲
 と云へば去年の夏頃腹のチフスの蟲が水と一緒に流れ込んで来た時に
 は驚いたよ、あの蟲は腹のチフスと云ふ位で私へ計り食つてか、つて
 あんな酷い目に逢つた事が無い、私も和郎さんも二十日計り泣き通し
 たつけ」胃吉「あの時の事はまだ忘れない、モー／＼斯んな商賣は廢
 めやうと思つた、蟲の居る食物は私も手を付けるのがイヤだから、そ
 つくり進げるよ」腸藏「イヤ／＼よこされて溜まるものか、何卒蟲を
 殺してお呉れ」胃吉「暇があると殺して居られるけれども、跡からド
 ン／＼遣つて来るもの、ソラ来た、今度は牛蒡の煮たの、煮たと云ふ
 のは名計りで、生も同様だ、ソラ人參も来た、どつこい今度は焼豆腐
 か、此の焼豆腐も少し怪しいよ、豆腐屋が賣れ残りの豆腐を焼いたと
 見えて矢つ張り蟲が交つて居る、オヤ蒲鉾が遣つて来た、蒲鉾と云ふ
 と魚の身で拵えた様だが此の蒲鉾は魚三分に芋七分、是れも去年到來
 の古物だし、腸藏さん、斯んな様子では逆も今日樂をする事が出來な
 いぜ、中途半端に今頃ドシ／＼食物が来る様では何んな目に逢ふか知
 れない」腹藏「食物だけで濟めば宜いけれども今に私達の大嫌ひなお
 酒でも飛込んで来たら百年目だ」胃吉「お酒が来たらモー仕事なんぞ
 するものか」と噂の言葉終らざる腹中の天地忽ち震動して上の方より
 押し来る酒の洪水「ソラ来た逃げる／＼」「津波だ／＼」と胃吉も
 腸藏も一目參に逃げて行く、

第三 酔醒め

「モシ／＼大原さん、大層お慶されです子、何うなさいました、怖い

夢を御覽になりましたか、モ一お目覺めなさいまし」と年若き妻君は年賀の客の年頃三十二三なる男が酔ひて臥したるを呼起す、ウームと両手を展ばして漸く我に還りたる酔餘の客妻君の顔を見て面目無氣に起き直り、「何うも是れは飛んだ御厄介をかけました子、御酒を戴いてあんまり好い心持になつてツヒうと／＼睡て了つたと見えます、僕は御種を飲むと何處でも構はず寝るのが癖で大きに失禮致しました」ご衣紋を繕ひ袴の皺を伸ばし手巾を袂より取出して再び三たび口を拭ふ、妻君は下女に命じて茶を一杯客に呈せしめ「お就寝になるのは一向構ひませんが大層お慶されたからお苦しからうと思つてお越し申したので、夢でも御覽になりましたか」客「ハイ見ました、妙な夢を見ました、腹の中で胃と腹腹とが對談をして頻に不平を溢して居る所を見ました、僕は學校に居た時分から校中第一の健啖家と稱せられて自分も大食を自慢にした位ですから僕の胃腹は随分骨が折れませう、胃は極度まで拡張し、腹は蠕動力を失つて居る位だと醫者が申します、學生時代に一年中臆病で苦んで思ふ様に勉強が出来なかつたのも全く大食の結果で、消化器を害すると必ず腦へ來るそうです、僕計りでありません、今の學生がよく腦病だ／＼云ふのは大概胃病の結果でその胃病は野蠻的の暴飲暴食から來るのです、僕はそれが為めに此方の小山君と同時に大學へ入りながら三度も試験に落第して同級生には残らず追越されて了ひ、去年の夏辛うじて纔に卒業し得た位です、それも今から考へて見ると全く教師のお情けでせう、試験の得點は落第點と殆ど間髪を容れず卒業者中最後の末位でした、アハ、然し持つたが病でまだ大食は發められませんが、悪いと知りつゝ、何うしても自ら制する事が出来ません、今朝なんぞは雑煮餅の大きいのを十八片食べました」妻君「オホ、貴方が物を召上るのはホントにお美事です、何を拵へても貴君に食べて戴くと張合があります、その積りで今珍らしい御馳走を拵へて居りますから何卒澤山召上つて下さい」客「イヤ、モ一控へませう、爾んなに戴くと胃吉や腸藏が何んなに怒るか知れませんが、だが然し大層好い匂ひがしますな、非常に香しくつてさも美味そう匂ひがと」頻に鼻を蠢かす、妻君笑ひながら「貴君が今迄召上つた事の無いと云ふ御馳走です、好い匂ひでせう、あれは南京豆です、只今南京豆のお汁粉と云ふものを差上げます」客「へい南京豆のお汁粉とは珍らしい、何うして拵へるのです」妻君「中々手数はかゝりま

すけれども手数をかけただけの御馳走になります、失禮ながら臺所へ来て御覽なさい、貴君も今に奥さんをお持ちなさると斯んな事を覺えて置きなさる方がお徳です」客「いかにも後學の為めだ、一つ拝見致しませう」妻君「拝見計りでは不可ません、少し手伝つて下さい」客「ハイ、お手傳を致しませう」と仲好き友達の家と見えて遠慮も無く臺所へ立つて行く、

第四 南京豆

臺所と云へば黒くくすぶりてむさ苦しき様に聞ゆれども此家の臺所は妻君が自慢顔に客を連れ込む程ありて平生の綺麗好き左こそと思はれ、拭掃除も行届き竈も板の間も光り輝く計り、その代り目の廻る程忙しきは下女の役、一人は頻に南京豆を炮烙にて炒り、一人は摺鉢にて搗碎く、妻君客を顧み「大原さん、私どもでは毎日南京豆を色々の料理に使ひます、今迄胡桃を使ふ代りに南京豆、胡麻を使ふ代りにも南京豆、胡麻和へと云ふ所も南京豆和へと云ふ風にしますが南京豆の方が胡桃よりも淡泊で或る場合には胡麻よりも余程美味う御座います、尤も南京豆の中でも粒の極く大きいものや圓い形状のものは脂肪が多くつて油を取るのには宜う御座いますけれども食用に適しません、少し細長い中位な粒ので大層美味い種類があります、それを先づ厚皮を剥て中の實計り此通り炮烙で炒ります」客「成程、此匂ひが今私の鼻を衝たのです子、市中で賣つて居る南京豆は厚皮のま、炒てあるでありますか」妻君「あれは細い砂を交て砂と一所に炒るのです、非常に時間がかゝつて料理用の間に合しませんから輕便法で剥た者を炒ますけれ共是も強い火で炒ると外面焦がして中へ火が通ません、弱い火で氣長に炒のです、よく炒れた南京豆を冷まして手で揉と蒞皮は樂に剥ますがよく炒れないと剥けません、剥た豆は御覽の通り搗鉢へ入て先づ摺木でよく搗碎いてそれから充分に摺潰すのですが是れも中々骨が折れます、炒り様が悪いほどねばりついて摺れません、一つ摺つて御覽なさい」客「イヤハヤ僕は味噌をさへ摺る事が下手ですから逆も駄目です」妻君「男の人は誰でも臺所の事を輕蔑して飯の炊き様も知らんとか、味噌を摺る事も出来ないとか被仰るけれども人間として自營の

道を知らんのはあんまり自慢になりますまい、戦争に行つて籠城したら何うなさいます、航海して無人島へ吹流されたら何うなさいます、高尚な學理は知つて居ても自分で自分を養う事が出来なかつたら不自由です子」客「爾う言はれては一言も無い、然しそれは追々覺えるとしてそれから南京豆を何うするのです」妻君「擂鉢でよく摺れたらお湯を適宜に加へて鹽と砂糖で味を付けますがモー一層美味しくするのは牛乳を半分程加へます、或はコンデンスミルクやクリームをお湯で溶いて加へても宜う御座います、見ていらつしやい、下女が今上手に拵らへてますから」と一々その順序を示し、再び客を以前の客間に誘つて「サア大原さん、漸く出來ました、貴君は屹度澤山召上るだらうと思つて大きな井鉢へ入れて來ましたから御遠慮無く何杯でもお更りして下さい」と下女に命じて南京豆の汁粉を前に呈せしむ、客は未だ胃吉と腸藏に對して憚る所あり「それでは少々戴きませう、餅は澤山ですから汁だけでも」と一口一口試みけるが舌打鳴らし「是れは美味い、實に美味い、炒つてある故か割合に淡泊ですな」妻君「左様です、何の料理にしてもひとつ、こくありません、中の餅も一つ召上つて御覽なさい別製ですよ」客「成程、此の餅も非常に軽くつて何とも言はれん味だ、是れは何と云ふ餅です」妻君「それは葛入餅と申して葛の粉少々と糯米と一所に蒸して十分に搗き抜たのです」客「道理で絹漉餅とも云ふべき位です、あんまり美味いので残らず平らげました」妻君「お更りをなさいまし」客「爾んなに戴くと過ぎませうけれどもあんまり美味いからモー一杯」と遂に三杯迄を傾けぬ、胃吉と腸藏如何に驚きけむ、

第五 嫁搜し

珍らしき御馳走に客は腹の膨る、迄飽食せり「奥さん、あんまり美味しいので三杯も平らげましたが軽いと云つても南京豆脂肪に富んだものですから胸が焼けて氣が重くなつてモー動けません、困りましたな」とさも苦し氣に見ゆ、妻君笑を含み「お茶を差上ませうか、随分よくお汁粉を召上りましたもの、お氣が重ければモー一度お就寝なさい、枕をお貸し申しませう、田舎では人にお餅を澤山御馳走して其跡で枕

を出す處もあると云ひますが、爾う云ふ時には無理に身體を動かさな
 いで静にねていらつしやる方が宜う御座います、マア御緩りとお遊び
 なさい、何うせ御用も無いのでせう」客「イ、工用事は大有りです、
 今日には平生知つた人の家へ残らず年始廻りに歩き度いと思ふので」妻
 君「それは大層御勉強です、良人なんぞは年始廻りがイヤだと申して
 近縣旅行に伊豆邊迄出かけました」客「僕も勉強して年始に廻る訳で
 ありません、少々外に野心があるのです、と云ふのは外でもないが多
 くの人の家へ往つて良い嫁を捜し度いと思ふので」妻君「オヤマア油
 斷がなりません子、貴君はモ一爾んな野心をお起しなすつたのですか、
 良人の話に貴君は大食家で有名だけれども品行はお堅くつて今迄一度
 も悪い噂を聞いた事が無い、あれは感心だと申して居りました、急
 お嫁さんが欲しくおなりですか、まだちつとお早いでありませんか、
 モ一三三年も過ぎてからで宜う御座いませう」客「僕も急に欲しくな
 つた譯ではありませんが少し急ぐべき事情があるのです、僕が愚圖々々
 して居ると國元から押掛女房が遣つて來さうなので」妻君「爾んなお
 方がお有りなさるのですか」客「外でもありません僕の従妹です、全
 體僕の家は分家で従妹は本家の娘ですが僕の學資を半分づ、本家から
 助けて貰つた恩もあり、もしや其の娘を貰つて呉れると云はれたら斷
 るに困ります、まだ別段親の口からも叔父の口からも何と云ふ相談が
 來た譯ではありませんが僕の親と向ふの親との間にその下心無きにあ
 らずで一昨年歸省した時、僕がそれを察知したのです、それに僕もお情
 けながら大學を卒業して文學士とか何とか肩書の付いて見れば國元の
 様な片田舎では鬼の首を取つた様に思ふのです、ヤレ卒業祝ひをする
 から歸つて來いの村中一統の名譽だから一度歸れのと去年から頻りに
 催促が來ますけれども迂つかり歸ると忽ち嫁の相談となつてその従妹
 を押付けられるに違無いから僕も國へ歸りません、成るべく此方で好
 い嫁を貰つてその後に歸り度いと思ひます」妻君「それならば尚ほ結
 構ではありませんか、そのお方をお貰ひなすつたら宜いでせうに」客
 「それが子、特別に悪い女と云ふ程でもありませんが何にしる奥州の
 山の中で育つた田舎娘です、教育も無ければ禮義も知らず、身體はと
 云つたら僕よりも大きい程の大女、赤ら顔で縮れつ毛で團子鼻のどん
 ぐり眼と來て居ますから何ぼ何でも東京へ連れて來て僕のワイフです
 と人中へ出せません、國元の方から何とも言つて來ない内に此方で早

く良い嫁を極めて了ひ度いのです、奥さんの何卒世話をして下さらん
か」と今の若き人には往々斯る事情の存するあり、